

## 5 事業創出活動

## □生涯学習分野

### びわ湖環境ビジネスメッセ 2013

「社会人文系の滋賀大学がなぜ農なのか?」「いつ農学部を創ったのか?」—— 会期中、ブースの看板「農を考える滋賀大学」を見て立ち寄られた多くの方々から、このような質問が寄せられ、本学関係者との対話が弾んだ。その意味で今回の出展は、地域貢献を重要な使命とする本学が、重点分野を「リスク」「環境」としていることを、学内外にあらためて広める機会になった。

ブース設計にあたっては、本学実行委員を中心に、両学部や各センターの多くのメンバーから協力をいただき、部局横断的な作業となった。会場での本学ブースの位置も、従来の産学官連携ゾーンではなく、「食と環境ビジネス」ゾーンへの出展とした。

狙いとしては、本学キャンパスに芽が出始めた、あらたな農業への思いや試みを、やがては地域の大きな流れとするため、そのシステム化をさぐりつつ展示や解説に取り組むという点にあった。我々の手に農業技術はないものの、多くの人びとや組織のつながりを大学として媒介することで目標に近づこうと挑戦したのである。この企画の背景には、社会人文系大学として、技術者たちが陥りがちな錯覚すなわち「すぐれた技術を持っておれば競争に勝ち、市場を席卷できる」という思い込みを修正し、本学の得意とするマーケティングやマーケットインの考え、行動等の意味を明らかにする意図があった。

また、農業ビジネス研究会を核に集まった学生たちには、社会の仕組みやモノづくり、プロモーション、PR等にチャレンジさせ、お客様の反応を確認しながら対応を工夫し、企画の変更も考えるといったインターンシップ研修に近い機会を提供する意図もあった。学生たちにとっては、教職員や来訪者と一体になって問題提起や提案を行い、地域の知の拠点、創造的コミュニケーションの場としての滋賀大学の将来を共に考える機会となった。4枚のパネルで学生研究を示したのもそれ故である。そのパネルの制作過程では、幾度も訂正を加えつつ着実に目標に近づくこと、つまり、諦めることや安易な妥協が許されない状況下での作業体験ができたといえる。

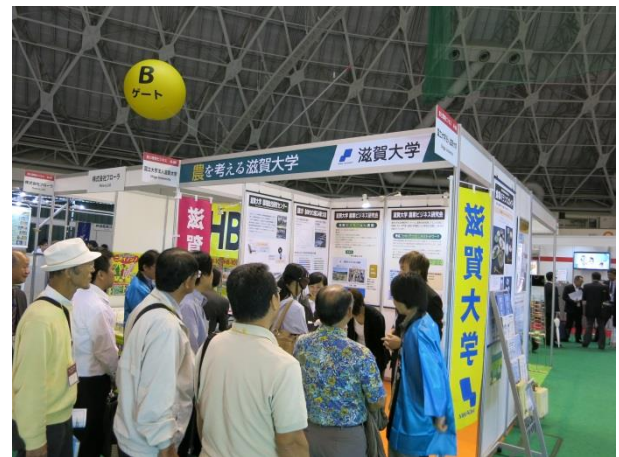
びわ湖環境ビジネスメッセの一番の特徴は、どのようなテーマであれ、びわ湖を抜きに語れないということである。そして、**びわ湖の水質改善**は滋賀県民のみならず、近畿の水がめとして1400万人の願いでもある。現在、工場や事務所の排水は公害防止法を初めとする種々の法や条例で制御され、生活用水は下水道の整備や浄化槽の活用でほぼ問題なしといわれるに至っている。しかし問題は農業濁水である。農業や化学肥料を含む濁水は規制されることなく、びわ湖に注がれている。

我々は、この問題への県内外の関心を高めようと、まず2大テーマ、すなわち「**食の安全と環境**」、「**びわ湖に注ぐ農業濁水の改善**」を掲げることにした。より具体的には、両テーマに対して、食糧自給率、食の安全の啓発指導、食育(こだわり農産物の推奨)、こだわり農業の推進、耕作放棄地の有効活用、地産地消(自産自消)の勧め等といった課題を絡め、学生とともに研究や実践を重ねてきたことを公表した。

本年度の本学ブースには、狭いながらも、かってないほどの来訪者が訪れ、本学のマスコットとして知られる「カモンちゃん」との写真撮影、環境学習支援士の方々のクイズ形式の環境意識啓発、農業ビジネス研究会の学生メンバーによる「利き野菜」「利きごはん」、ゆりかご水田の経済効果紹介(ビデオ放映)、教育学部の知見を示す冊子『滋賀県の伝統食を活用した食事バランスガイド』の配布等、さまざまな手段で、来訪者が、楽しみながら「農を考える」体験を提供した。

ふり返れば、来訪者と学生・教職員が一体となった全員参加型の、且つ全員が主役のイベントとして価値あるものとなった。小生もTV取材 1 件、新聞社や業界の報道組織の取材 2 件を受け、自らの知見を整理するとともに、本学が掲げた課題への興味を、従来にもまして深めることになった。

(文責 特任教授 若林 忠彦)



【びわ湖環境ビジネスメッセ 2013 の様子】